

広島大学マスターズ広島 第6回ミニ懇話会報告
——岩崎文人先生講演「原子雲の下で」を聴いて——

有元伸子

2026年2月28日、広島大学東千田キャンパスにおいて、広島大学マスターズ広島第6回ミニ懇話会が開催された。講師は広島大学名誉教授であり、元ふくやま文学館館長を務められた岩崎文人先生で、題目は「原子雲の下で——大田洋子・原民喜・栗原貞子・峠三吉——」であった。

岩崎先生は、1944年岡山県生まれ。国木田独歩、正宗白鳥、井伏鱒二といった地域ゆかりの作家研究をはじめ、『広島県現代文学事典』の編纂や原爆文学研究、とりわけ占領期の検閲問題に関する実証的研究によって知られる。本講演においても、長年の研究成果に裏打ちされた豊富な資料と緻密な構成により、原爆文学の問題を多角的に提示された。

講演は、近年の原爆に関する意識調査の紹介から始まった。広島県では平和教育が充実しており、子どもたちの原爆に関する基本的知識については高い理解が見られる。しかし一方で、原爆投下に至る過程や、アメリカ側の事情については十分に知られていない現状が指摘された。テニアン島や硫黄島の戦略的重要性、さらには原爆投下候補地として京都、新潟、広島、小倉、長崎が挙げられていたことや決定の状況など、広島に住む私たちにとっても必ずしも自明ではない事実が丁寧に説明された。

また、広島の前爆被害を象徴する「きのこ雲」の写真が、米軍機によって急旋回ののち松山上空付近から撮影されたものであることなど、戦争の実態を具体的に把握するための視点も提示された。こうした説明は、被爆の出来事を単なる「知識」としてではなく、歴史的現実として捉え直す契機となるものであった。

とりわけ印象的であったのは、被爆の実相をめぐる語りの問題である。被爆者が描いた絵において、人々が腕を上げて逃げる姿が繰り返し描かれているのは、強烈な熱線によって皮膚が垂れ下がるためであるという説明がなされた。そして「本来、語るべき人々がすでに亡くなっている」という指摘は重い。原爆によって1945年のうちに14万人もの命が奪われたが、その一人ひとりに固有の人生があったはずであり、それを単なる数字として記号化してはならないという強い問題提起がなされた。

この点において、文学の果たす役割が強調された。文学は、「原子雲（きのこ雲）の下で」亡くなった人々を、顔と名前をもった個々の存在として描き出

し、その記憶を次世代へと伝える営みである。被爆体験の直接の語り手が減少していく今日において、文学の意義はいよいよ増しているといえよう。

講演の中核では、充実した配布資料に基づき、原爆文学を代表する4人の作家——大田洋子、原民喜、栗原貞子、峠三吉——の作品が紹介された。さらに、8月6日の出来事が文学のみならず、記録、絵画、映画、写真、漫画、歌曲など多様なメディアにおいてどのように表現されてきたかが整理された。多くの本や写真を示しながらお話され、回覧された資料の中には、原民喜が亡くなる前年に広島で行った講演の写真など貴重なものも含まれており、参加者の関心を集めていた。

また、漫画作品にも言及があり、旭丘光志『ある惑星の悲劇』など、地球規模の視点から核を捉える試みが紹介された。こうした視点は、近年の環境問題やエコロジー的思考とも響き合うものであり、原爆文学の射程が現在の問題とも連続していることを示している。

さらに重要な論点として、占領期における表現の抑圧、すなわちGHQによる検閲の問題が取り上げられた。CCD（民間検閲支隊）による検閲は、事前・事後の両面で行われ、原爆に関する記述も厳しく統制された。原民喜の「夏の花」が当初「原子爆弾」という題であったにもかかわらず変更を余儀なくされたことや、大田洋子の『屍の街』が最初は完全な形では発表できなかったことなど、具体的事例が示された。

とりわけ興味深いのは、占領軍による検閲の方法である。戦前の日本の検閲では伏せ字などによってその痕跡が可視化されていたのに対し、占領期の検閲は活字を組み直させるなどして、検閲の存在自体を読者に気づかせない巧妙なものであった。その結果、出版社や作家の側に自己検閲が生じ、表現の自由が大きく制約されていた実態が明らかにされた。

講演の終盤では、広島を「被害」と「加害」の両面から捉える必要性が指摘された。広島は原爆による甚大な被害を受けた都市であると同時に、日清戦争時には現在の広島城跡に大本営が置かれ、帝国議会も開かれて首都機能を担い、宇品港から多くの兵士が出征した軍都でもあったという複雑な歴史認識が提示された。栗原貞子の詩「ヒロシマというとき」を引きながら、被爆の記憶と加害の歴史を切り離さずに理解することの重要性が強調されたのである。

岩崎先生は、私にとっては故・磯貝英夫先生の門下の大先輩であり、大学院生時代からご指導を仰いできた。のちに同じ広島大学に勤務する機会を得て、研究や学会活動においても多くの示唆をいただいた。本講演では、90分にわた

り立ったまま、マイクを用いずに明晰な語りを続けられるそのお姿に、変わらぬ研究者としての気迫を感じ、深い感銘を受けた。

本講演を通して改めて認識させられたのは、原爆の記憶をいかに若い世代に継承していくかという課題の重さである。被爆者の高齢化が進むなか、直接の体験を語る声は確実に減少している。そのとき、文学や教育、さらには多様な文化的な表現媒体が果たす役割は極めて大きい。子どもたちに、原爆のもたらした悲惨な体験を、正確に、しかしトラウマを与えることなく伝えること。と同時に、広島を歴史を単純化することなく、その複雑さと向き合う姿勢が求められている。核の使用が危惧されている現在の逼迫した世界情勢にあって、今こそ原爆文学を手にとり、考え続けなくてはならないだろう。

今回のミニ懇話会は、こうした課題について改めて考える貴重な機会となった。会後の親睦会においても、岩崎先生や会の皆さまと親しく語り合い、有意義な時間を過ごすことができた。多様な分野の会員が集う本会において、広島をめぐり原爆の問題が共有された意義は大きい。今後もこのような場が継続され、議論が深められていくことを期待したい。